

ウルリム
響

星 光

特定非営利活動法人

聖公会生野センター機関誌

第66号

2017年11月25日発行

題字：康秀峰

URL <http://www.nskk.org/province/ikuno>

E-mail: nskkikuno@gmail.com

聖公会生野センター 検索

「尹東柱さまにささげる歌」

——生誕100年に寄せて

司祭 井田 泉

詩人・尹東柱（ユンドンジュ）は、1917年12月30日、中国吉林省明東に生まれた。日本による朝鮮植民地支配の時代である。彼は延禧（ヨニ）専門学校時代に多くの珠玉の作品を書いた。そのひとつは「星を数える夜」である。

季節が移りゆく空には／秋でいっぱい 満ちています。

わたしはなんの憂いもなく／秋の中の星々をみな数えられそうです。……

星ひとつに 追憶と／星ひとつに

愛と／星ひとつに 寂しさと

星ひとつに 憧れと／星ひとつに

詩と／星ひとつに お母さん、お母さん、

……

自筆原稿を見ると、コクヨの400字詰め原稿用紙に万年筆で書かれたこの比較的長い詩は、次の言葉でいったん終わり、（一九四一・十一・五）という年月日が付されています。

この星の光が降る丘の上に／わたしの名まえの字を書いてみて、

土でおおってしまいました。

夜を明かして鳴く虫は／恥ずかしい名を悲しんでいるからです。

日本渡航のために「平沼東柱」と改名せざるを得ない。その名を彼は恥ずかしく思い、書いてから土で覆ってしまったのでしょうか。しかしこの後、彼は次のような言葉を書き足しました。

けれども冬が過ぎて わたしの星にも春が来れば

墓の上に青い芝草が萌え出るように

わたしの名まえの字がうずめられた丘の上にも誇らしく草が生い繁るでしょう。

まるで彼は自分を待ち受ける死を予感し、しかしそれが終わりではないことを知っていたかのようです。

翌1942年彼は日本に渡り、立教大学に、次いで同志社大学に学びますが、43年7月、京都下鴨署に逮捕され、治安維持法違反で懲役2年の判決を受け、45年2月16日、福岡刑務所で息を引き取りました。満27歳でした。日本語で詩を書くこと自体が、大日本帝国に対する反逆と見なされたのです。

やつれ果てた彼を最後に福岡刑務所に見舞ったのは、父の従兄弟・尹永春（ユンヨンチュン）でした。彼の子、つまり尹東柱にとって又従兄弟（またいとこ）にあたる尹亨柱（ユンヒョンジュ）は、父から尹東柱のことを繰り返し聞いていたでしょう。尹亨柱は、1983年4月に発売された「尹東柱詩朗誦集」に、自作の「尹東柱さまにささげる歌」を収めています。

あなたの天は どんな色だったので／あなたの風は どこへ吹いたので
あなたの星は 何を語ったので／あなたの詩たちは このように 息をするのでしょうか……

夜通し 苦しんで 夜明けを迎え／恋しさに傷ついた風が ふるさとに 駆けていくとき



あなたは遠い空 冷たい冷たい 空気の中で／あなたの息を 引き取らねばならなかったのですか …
死んでいく すべてのものを 愛したあなたは／むしろ 美しい魂の光であれ
木の葉に 起こる風にも 苦しんだあなたは／むしろ むしろ 美しいいのちの光であれ
尹東柱の詩と死が、そして決して消えることない光が、この中にはちりばめられて歌われています。
「共謀罪」「安保法制」などが強行成立させられ、平和憲法の根幹が脅かされている今日、尹東柱を記憶することは、この国が失いつつある尊いものを思い起こさせ、わたしたちを平和の道へと促します。
(奈良基督教会牧師 いだ・いずみ)

イルムの革命

サラムを生きたいならば
ただイルムを名のればいい
イルムさえ名のっていられたなら
生活があなたをサラムへと育てるだろう
イルムを名のるのはたやすいことであるはずなのに
イルムを名のっては生きがたい
それが在日の現実だから
イルムを名のってさえすれば
あなたの人生が
自他に革命を起こすだろう

イルム：名前。ここでは通名ではないウリ民族名のこと。

ウリ：我々、我が。

ウリ民族：コリアン、朝鮮民族、韓民族。

丁章（チョン・チャン）
1968年、京都市にて出生。在日3世。
大阪外国語大学（元・大阪大学外国語学部）Ⅱ部中国語学科卒業
現在、東大阪市在住

鶴橋歩きとコリアンブックカフェ訪問

呉 光現



10月14日、今にも雨が降りそうなどんよりとした空模様でした。

聖公会生野センターを支える大阪教区後援会が生野地域で学習会を実施しました。

コースは鶴橋商店街の散策、在日コリアン青年連合（KEY）が運営する青年のためのブックカフェ・チェッチャリ訪問、そして在日4世の青年の歩みの話に耳を傾け、最後には鶴橋で買った韓国食材で懇親会を持ちました。少し欲張ったプログラムでしたが一つ一つが楽しく、有意義なものであったと思います。

鶴橋の「散策」では週末の観光客であふれる中をここ10年来、韓流ブームが定着した雰囲気ニューカマー韓国人が経営する食材屋さん、食堂、アパレル店等を見ながら生野区コリアタウンの変化を実感できたと思います。鶴橋には大阪城南キリスト教会の信徒さんが営む店舗もあり、商品にハングルの説明文もありました。ここにも時代の変化を感じました。

ブックカフェ・チェッチャリはハングルで「책자리」と書き意味は「本の場所」です。今、若い人たちは繋がって歩みことが困難と言われています。そこで書籍を通して青年たちが集える時空間を提供しようという在日青年たちの新しい試みです。35歳までの青年なら国籍、民族を問わずに

会員になれるとのこと。そこには韓国朝鮮関連の文学、社会科学、写真集や韓国音楽を中心にした構成ですが、日本社会に関わる書籍も置いています。落ち着いた雰囲気に参加者もひととき静かに読書の時間を持ちました。時間の都合で惜しみつつ在日青年の歩みを伺いました。

Hさんは20代後半の在日4世。父が3世で母が日本人です。子どもの時、元旦は韓国のお雑煮トックを食べ二日は母方の実家で日本のお雑煮を食べてきました。トックが韓国料理とは知らずに中学生まで自分自身は日本人とっていました。初めて日韓のダブルと知った時は日本人でないのがショックだったそうです。身体の半分が空っぽになった気がしてその半分を知りたくなりましたが親からは口止めされたと言いました。

初めて韓国について本を読んだのは嫌韓流でその内容を素直に信じてしまい大学入学後授業や映画会を通して自己のアイデンティティを模索するようになり現在いろんな活動に参加していると語りました。

在日2世の私にとって「多様性」という一言で語れない後輩たちの葛藤に直接触れてとても思うところがありました。

最後に韓国料理を頂きながら懇親会では在日いろんな風に広がっていると共に社会的に共に生きていくにはまだまだ日本社会は課題があると学んだ1日でした。

(オ・クァンヒョン 聖公会生野センター総主事)

のりばん

週3回楽しみの昼食

2005年に小さな民家を借りて始めました。毎週3回美味しい韓国料理を頂きながら楽しく過ごしています。

2017年10月16日（月）にのりばんに集うオモニたちに感想を伺いました。

- ・食事が美味しい。
- ・好きな時間に来て帰れるので自由で気が楽です。
- ・楽しくお話ができるし、人とのふれあいがあるので、とても大切な処です。

ボランティアの感想

以前は旅行にも行きましたが、今は年齢を重ねて行けなくなりました。というオモニの言葉を聞いて、オモニたち、また私たちボランティアも年を重ねたことを実感しました。これからののりばんについてですが、食事が美味しくて自由な居場所が続きますようにと願っています。（伊藤 美佐子 京都聖ステパノ教会）



こみち寄席

奇数月の第4月曜日開催です

聖公会生野センターの最初のプログラムです。地域の人が「下駄履き」で気軽にセンターに参加できる思いで始めました。1992年から年6回開いています。記念の会には笑福亭仁鶴さん、鶴瓶さん、桂きん枝さんも来演してくださいました。今年7月で150回を迎えました。

笑福亭仁鶴さん談：いつもいいお客さんで楽しく演じています。30代だった私も還暦近くなりました。これからも多くの人が笑いに来てください



鶴橋歩きとコリアンブックカフェ訪問

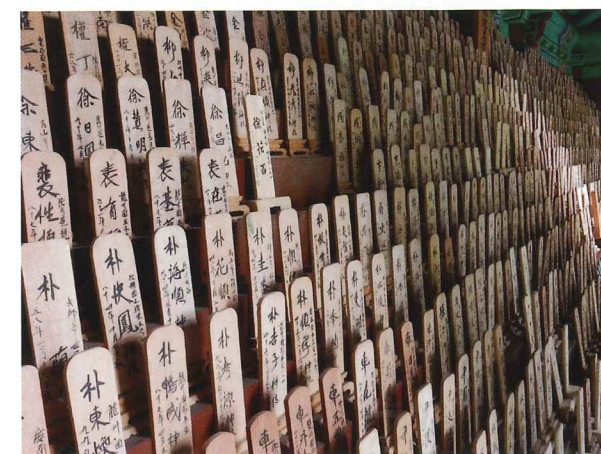
（左）鶴橋の路地裏を歩く

（右）ブックカフェ・チェッチャリにて



韓国のヒロシマ、ハップチョンを訪ねて

（左）韓国原爆被害者資料館にて、
シム・ジンテク 陝川支部長と一緒に
（右）原爆犠牲者の慰霊碑



「日韓協働の祈り」

（左）復元された柳寛順の生家
（右）柳寛順が通っていたメボン教会



韓国のヒロシマ、ハップチョンを訪ねて

呉 光現

9月、韓国のヒロシマと呼ばれる陝川（ハップチョン）を訪ねた。友人と3人の旅である。きっかけはネットで「陝川に『在韓被爆者原爆資料館』がオープンした」という記事に接したことであった。釜山からバスで約2時間。山間の村だ。

迎えてくれたのは韓正淳さん、被ばく2世で58歳。明るい方である。事前に本で接していたが、彼女は原爆症からの病と貧困のため高校には進学できず、働いても数日で休まねばならない人生、そして生まれてきた子どもは重い障害を持っている。更に30歳で下半身に人工関節を入れなければならなかった。2005年に35歳の若さで亡くなった韓国原爆2世患友会会長だった金亨律さんとの出会いが今の彼女があるという。被ばく2世に対しては全く補償、支援の手はない。多くの被ばく2世が苦しんでいる中で、正面から自分たちの生をかけてそれに挑んでいる方だ。

行った先は在韓被爆者原爆資料館。小さな所だがじっくりと見学し、2階の資料室に上がった。説明をしてくれたのは韓国原爆被害者協会陝川支部の会長のシム・ジンテさん。そこで目にしたのは1972年に初めて実施された実態調査の原本。多くの人の名前、生年月日、性別、被ばくした広島での住所・・・そして創氏改名の名前・・・。日本のために軍都広島に動員され、原爆被害を受け、故郷に帰り、病と偏見・差別の中で生きてきてその上まだ・・・創氏改名の日本の名前・・・が醜く記載される。理屈はわかる。あまりにもわかる。実態を正確にするためには当時の創氏改名の名前も資料として必要だ。しかし、全く放置された人たちが初めて自分のことを残すためであろうと創氏改名

の名前は被害者を冒涇していないか。私は日本名で育った。20歳になってようやく呉光現（オ・クァンヒョン）と名乗り40年が過ぎた。子どもたちにもその苦しさを与えたくなく、韓国人としてすくすくと育ってほしいと願い、一つの名前で育ててきた。私とは比べる由もない人生を送ってきた人たちがその苦しみを植え付けた張本人である・・・日本の名前・・・。それを陝川で見なければならない。「耐えられない、耐えられない、耐えられない」、その瞬間を忘れることはできない。

翌日、亡くなった方の慰霊堂を訪れた。一人一人の名前を没年、出身地を記した位牌がぎっしりと並べられている。そこにも姓の下にカタカナの名がある。ここでもそうか！もっと早く訪問すべきだった。しかし「そこに立つ」ことができたのは還暦を過ぎて年に1回は「すべてを離れてしたいことをしたい」と決めた最初の「したいこと」が陝川の訪問だったのは幸いだ。

現在、在韓被爆者はアメリカ、日本、そして原爆を作ったメーカーを相手に訴訟を起こしている。とても遠い、厳しい闘いであるのは間違いない。だがそこには本当に原爆・核そのものが人類だけでなくすべての命あるものに罪悪であるという崇高な思いがある。その闘いが多くの人を勇気づけることを願わずには得ない。

美しい田園、山並み、豊かな水、素晴らしい陝川の村が世界に平和を発信しようとする、このすばらしい営みに感謝だ。

（オ・クァンヒョン

聖公会生野センター総主事）

「被ばく者差別をこえて生きる」

青柳純一 編訳・著「被ばく者差別をこえて生きる 韓国原爆被害者2世金亨律とともに」三一書房

司祭 古澤秀利

本書は韓国原爆被害者2世である金亨律（キム・ヒョンニユル）の遺稿集であり、伝記であり、彼の意志を継ぐ人々の記録です。著者（編訳者）の青柳純一は釜山大学をはじめ日本関係学科の客員教授でした。2001年に旧釜山地裁（現、東亜大学土城洞キャンパス）で行われた強制連行・労働をめぐる三菱関連裁判傍聴後の集まりで、著者と金亨律は出会いました。「小柄で見るからに病弱そうな」金亨律が著者に「日本人として、韓国の原爆2世についてどう思いますか」と何気ない口調で問いかけたのでした。

金亨律の母親である李曲之（イ・ゴクチ）は5歳のときに広島で被ばくしました。爆心地から3km余り離れた舟入川口町で被ばくし、父親と姉を失います。そして被ばくした母親と妹の三人で帰国し、母親の実家である陝川（ハップチョン）近郊の農家で暮らししました。その後、金鳳大（キム・ボンデ）と結婚し1970年7月28日に釜山市東区水晶洞（スジョンドン）で一卵性双生児を出産します。この兄の方が金亨律でした。

金亨律には他に二人の兄と姉そして妹がいました。他の兄弟は元気でしたが金亨律は常に病気がちでした。双子の弟も病弱で1歳半で肺炎のため亡くなります。その後も金亨律は体調不良のため小中学校のほとんどの期間を休むことになります。なぜ自分だけが病弱であるのか、その原因すらわからない状態で

したが、彼が25歳のとき精密検査を行い、「先天性免疫グロブリン欠乏症」であること、そして原爆後遺症によるものだということが判明します。

金亨律が著者に質問した際の「韓国の原爆2世」とは、広島・長崎で被ばくし祖国に戻った原爆1世から生まれた人々を指します。原爆被害者70万余人のうち、韓国人被害者は7万余人と言われています。生き残り祖国に帰った人々もまた原爆後遺症に苦しみましたが、日本政府からも韓国政府からも保障はありませんでした。原爆1世は精神的・肉体的・経済的苦痛と負って生き、それらは原爆2世へと引き継がれていきます。

2005年現在で原爆後遺症に苦しむ原爆2世は2300余人でした。彼らは「病魔による将来への不安、そして自分の病気や事情に対する社会の無関心からくる疎外感などに苦しんでいます」と金亨律は言います。そして彼が訴え続けた事柄の一つが「先支援、後究明」でした。苦しんでいる生命がそこにいる。その生命を支えることが何より優先されるべきだ、と主張します。金亨律は東京で最後となる発表をした8日後、2005年5月29日に34歳の生涯を閉じます。文字通り、その身を削って「声なき者の声」となったのでした。金亨律から著者への問いかけに私たちは何と答えるのでしょうか。

（大阪聖愛教会牧師 ふるさわ ひでとし）

コラム・一粒の麦

「日韓協働の祈り」

1919－2019＝31 独立運動 100 年を祈りの鎖で

呉 光現

11 月 6 日から 8 日まで韓国中部の天安（チョナン）というところで日韓聖公会合同会議を開催いたしました。これは 1984 年に管区の正式交流が始まり日韓の協働が進められてきたことに由来します。その協働は今年で 33 年を迎えました。ここ数年は毎年日本と韓国で交代で合同会議を開催しています。昨年からは会議だけでなく日韓それぞれの歴史の現場や教会を訪問しつつ相互理解を深めるように努めています。

現在、日韓両国は歴史問題で深刻な葛藤を持っています。「国益」という言葉が当たり前のように使われていますが、本当は市民同士、私たちの場合は信仰者同士が共有できるのもデス。ですから私たちキリストに繋がる兄弟姉妹はそのような「国」の諍いではなく、共に心を合わせて祈ることを大切にしてきました。

天安は 1919 年に韓国で独立運動がなされた時とても重要な場所です。柳寛順（ユ・グァンスン）という女性をご存知でしょうか？梨花女学堂（現在の梨花女子大学）に通う学生でした。彼女はソウルで独立運動を目の当たりにして故郷の天安に戻ります。メソジスト教会に通っていた彼女は 10 代にもかかわらず独立運動を主導します。彼の地で印刷された独立宣言文は天安の隣町の聖公会の並川（ピョンチョン）

教会です。天安地域での独立運動はキリスト者が多く参与しました。今回は 1919 年 3 月 1 日に始まった 31 独立運動と教会の働きを学びました。

さて 2 年後は 31 独立運動から 100 年を迎えます。独立宣言の一部には「東洋平和に重要な一部をなす世界平和、人類幸福に必要な階段とさせるものである」とあります。この運動は中国の 54 運動やインドの独立運動にも影響を与えました。正に植民地支配からの脱出が東洋の平和に繋がっていくものだったのです。

日韓聖公会は 2019 年の 31 独立運動 100 年を 1 年かけて祈りつつ迎えることを呼びかけることになりました。実は 1919 年の 2 月 8 日に東京にある東京朝鮮 YMCA（現東京韓国 YMCA）で朝鮮人留学生の独立宣言がありました。31 独立運動のルーツは日本にもあったのです。2019 年の 2 月 8 日を東京で共に祈り、3 月 1 日はソウルで共に祈る。その協働の祈りを日韓の和解、東アジアの平和へと祈りの鎖をつなげていきたいと願っています。

この度の日韓の合同会議で日韓両聖公会が 2018 年 3 月を起点に平和と人権の伸張を願う 1 年にしていきたいと話されました。この和解と相互理解の働きに一人一人がこの鎖の祈りの輪に参与し広げていくことを願ってやみません。（オ・クァンヒョン）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇ 正 会 員 年額 1 口 10,000 円

◇ 後援会員 年額 1 口 3,000 円から

・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」

◇ 自由献金・クリスマス献金

・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」

・銀行振込 三菱東京 UFJ 銀行 東大阪支店

普通預金 4654965 「特定非営利活動法人聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0002

大阪市生野区小路 3 丁目 11 番 19 号

TEL 06-6754-4356 / FAX 06-6224-7856

E-Mail nskkikuno@gmail.com

<http://www.nskk.org/province/ikuno>

発行人：磯 晴久

編集人：呉 光現